

セッション	C. 語彙論: 語の用法 (2014.3.22 於 北京日本学研究中心)
タイトル	中日同形類義語“以外”と「以外」に関する一考察
著者名(所属)	潘蕾 (北京日本学研究中心 センター 文化研究室)
連絡先 Eメール	panlei349@hotmail.com

## 論文内容

(背景および研究目的)

“一概”と「一概」、「以外」と「以外」などのように、現代中国語と現代日本語の中に同形のもものが少なからずあり、これらの同形語が中国の日本語学習者及び日本の中国語学習者に便宜をもたらすと同時に、外見があまりにも似ているゆえに、使用者の母語の用法に従って誤用されることもしばしばある。1978年に日本文化庁から出版された『中国語に対応する漢語』によれば、中日両国語の“以外”と「以外」は「同じか、またはきわめて近いもの」の部類に分類されている。しかし、筆者の中国語・日本語教育及び翻訳・通訳の経験からすれば、この分類がなお検討の余地があると思われる。よって、本稿では中国語の“以外”と日本語の「以外」を対象として、両者の異同を明らかにしてみたい。

(検討方法等)

本稿では、辞書の解説と例文を基としながら、中国語の“以外”と日本語の「以外」の使用実態を考察するために、筆者が“北京大学中国語学研究中心 CCL 語料庫”と「現代日本語書き言葉均衡コーパス(少納言)」から実例を抽出し、“以外”と「以外」の意味及び用法をそれぞれ分析したうえ、両者の異同をまとめた。さらに、辞書及びコーパスの例文の訳文に対する分析を通して、両者の異同をより明らかにすることを試みた。

(結果および考察)

まず品詞から見ると、“以外”は方位詞であり、「以外」は名詞である。次は意味から見ると、“以外”は「一定の時間・場所、数量、範囲の限量を超えた」という意味を、「以外」は「それより(ほか)、それを除いたほか、そのほかのもの(こと)」という意味を表し、両者とも単独では使えない。さらに接続方法に関しては、“以外”は名詞、代名詞、数量詞、形容詞或いは文節のどちらの後にも付けられ、その一方、「以外」は名詞、代名詞、動詞、形容詞の連体形には付けられるが、数量詞の後には付けられない。最後に文体から見ると、“以外”は書き言葉にも話し言葉にもよく使われ、その使用頻度がかなり高く、「以外」は書き言葉にはよく使われるが、話し言葉にはあまり使われていない。以上の考察を踏まえて二語が使われる例文の訳文を分析すると、“以外”をそのまま「以外」と訳せる文が少なく、中国語の“以外”の使用範囲は日本語の「以外」より随分広いことが窺える。

(結論)

なぜ日本語の数量詞の後に「以外」が付けられないだろうか。以下のことが考えられよう。

中国語の“以外”は二通りの意味を持っている。一つは、「(除了)～以外」という形をとって使っており、日本語の「ほか」「～を除いて」という意味に当たる。この場合、日本語の名詞、代名詞、動詞、形容詞の連体形の後には付けられる。もう一つは、「一定の時間・場所、数量、範囲の限量を超えた」という意味を表し、具体的な時間・空間・範囲の外にあることを指している。しかし、日本語の「以外」の場合、このような意味が薄くなり、抽象化されて、具体的な空間・時間・範囲の外にあるという意味を表すことはできない。例えば、「五時間以外(×)」という時間を指す場合も、「十メートル以外(×)」という距離を指す場合も、「二十歳以外(×)」という年齢を指す場合も皆具体的な数字であるため、その数字の後には「以外」が付けられないのである。

## 参考文献

- 施建军・洪洁《汉日同形词意义用法的对比方法研究》(《外语教学与研究》第45卷第4期、2013年7月)  
 中国社会科学院语言研究所词典编辑室/编《现代汉语词典》(第五版) 商务印书馆 2005年  
 北原保雄/编 于日平・徐一平/中文版主编《明鏡日汉词典》高等教育出版社 2012年  
 早稲田大学語学教育研究所/編『中国語と対応する漢語』文化庁 1978年  
 呂叔湘/主編 牛島徳次・菱沼透/監訳『現代中国語用法辞典』現代出版 1983年  
 林史典(ほか)編『国語基本用例辞典』教育者 1986年  
 金田一春彦/編『学研国語大辞典』第二版 学習研究社 1995年  
 北原保雄/編『明鏡国語辞典』大修館書店 2002年